



闘牛の勝負は数秒から三十分を超える熱戦までさまざまです。もうもうと立ち上る土煙の中、勢子(せこ)と呼ばれる闘牛士がヤグイという独特の掛け声で牛を叱咤・鼓舞。鼻息荒く、目を血走らせた牛が角を突き合わせ、一トン近い巨体をぶつけ合い、その圧倒的な迫力で観衆を興奮の渦に巻き込みます。見どころは巧妙に仕掛け合う技の数々。角を掛けて相手の首を曲げる「カケ」や、側面から攻撃をしかける大技「腹取り」、相手の眉間めがけて角を突き出す「フリ」や「ツキ」など多彩です。角にも特徴があり、技

げんき
歴史に残る
名勝負を生み出す、
「取り組み」の大切さ。

と防壁に最適な前にとがった角は「トガイ」、真上に伸びた「タッチユ」、左右不ぞろいな「ヒューゲ」など、ユニークな闘牛名の由来にもなっていることも。技の訓練は子牛から始め、何度も練習を繰り返させます。

春と秋の全島闘牛大会や、各地区の大会などで、闘牛のおもしろさを左右する「取り組みの作成」は幸地さん達の最も重要な仕事です。「役員全員で闘牛の実力や大きさ、技などを総合的に考慮し、熱戦になるよう取り組みの番付を決めていきます。これが大変！」とのこと。「今日の取り組みは最高だった！と年配のファンにも喜んでもらえるのが一番のやりがい」と松田さんも熱く語ります。

げんき
闘牛ファンの長年の
夢がついに完成！
「石川多目的ドーム」

新闘牛場「石川多目的ドーム」のこけら落としには「全国闘牛サミット協議会」が開催され、全国から闘牛が盛んな市町村の関係者が出席し、記念の「大闘牛大会」が盛大に行われました。

新しい闘牛場の開設について、松田さんは近代的な施設を生かし「今後は観光客や県内の若い人たちを集客できるような闘牛の新しい形をみんなで考えていきたい」。幸地さんも「観光資源のひとつとして、闘牛をどう発展させていくかが大切」と今後の課題を掲げます。他にも懸賞金制度や闘牛歴史博物館の構想など、拠点ができただけで夢も大きく広がりました。うるま市では初心者でも闘牛を楽しむための闘牛ハンドブックで情報を提供するほか、県内の闘牛愛好者が運営する闘牛専用サイトも開設しています。

闘牛は、「人生そのもの」「大好きな生きがい」と語る二人。闘牛に魅せられた男たちの夢とロマンが地域に溢れているような気がしました。

●闘牛 in Okinawa <http://www2u.biglobe.ne.jp/~office21/>



今年5月、うるま市石川に屋根付きの全天候型闘牛場「石川多目的ドーム」が完成しました。最大4,000名を収容する同施設の完成は闘牛を通じ地域興しをめざす関係者にとって20数年来の悲願でした。今回は地元

うるま市闘牛組合連合会 会長 幸地良春さん (左)	1952年、旧具志川市天願(現うるま市天願)生まれ。約10年前に牛主になる。旧具志川市闘牛組合連合会会長を6年務め、うるま市合併後、平成18年に結成されたうるま市闘牛組合連合会の初代会長に就任し現在、8組合を束ねる。連合会全体で組合員数230名、登録牛約130頭を誇る。
うるま市石川闘牛組合 組合長 松田久仁雄さん (右)	1958年、旧石川市(現うるま市石川)生まれ。20代前半で友人と共同牛主になる。平成16年よりうるま市石川闘牛組合長に就任。現在、組合員数25名、登録牛20頭。

げんき
牛と人が互いに
心を通わせ合う、
闘牛の魅力。

県内には現在十四の闘牛場があり、中でもうるま市石川や具志川地区は昔から闘牛が盛んな地域として知られています。「子供の頃から闘牛は身近な存在でした。親父が十二年前に牛主になり、それがきっかけで私も子牛を飼いはじめました」と幸地さん。二頭目の牛を弟に譲り、現在はいうるま市の八つの闘牛組合を束ねる連合会会長を務めます。松田さんは、うるま市石川の闘牛組合長になって三年目。中学生の頃に初めて闘牛を観戦し、「闘牛を飼っていた友達の家へ遊びに行くうちに世話を手伝うようになり、自然に闘牛にハマったと笑います。現在は一トン近くある黒毛和牛「山田若力」やまだわかぐて」を所有。この牛は三期前の全



「闘牛(ウシオーラセー)」

愛する町のために、地域の元気のために、「一生懸命活動している人がいます。このコーナーではそれを「沖縄のげんき仕掛人」と呼び、ユニークな活動を応援していきます！

沖縄の 대중娯楽の華「闘牛」の楽しさを
もっと多くのの人々に伝えたい！



島闘牛大会のチャンピオンで、世話を手伝ってくれる息子の高志さんもやはり闘牛好きなんだとか。

牛は長く世話をしていると情が移り、愛おしく感じると口をそろえて語る二人。愛牛が激戦を勝ち抜いたときは、牛主も涙を流し喜びを分かち合います。「牛も自分が勝ったことがわかる。しっぽを振って喜びますよ」と幸地さん。松田さんも傍らで大きくうなずきます。人と牛の気持ちが一体となって、大きな感動のドラマを生み出すのです。

沖縄県広報誌 平成19年7月1日発行第31巻7号通巻382号

企画・編集 沖縄県知事公室広報課
発行 沖縄県知事公室広報課
〒900-8570
那覇市泉崎1-2-2
電話 (098) 866-2020

制作・印刷
株式会社エマインタープライズ
〒900-0006
那覇市おもろまち1-5-26
電話 (098) 868-9332

編集後記

久々に実家へ帰ると「ひえっ!」と母の悲鳴。「どうしたの、そのまん丸い顔は!」とのこと。そういえば最近、服がキツくなったなあと思いつつ体重計にのると、自己最高値をマーク。スポーツを始めなきゃならないのは、誰よりもまずこの私なのでした。(R)

梅雨も明け、いよいよ夏本番!休日には海、山、バーベキューもいいな〜ここ数年海で泳いでいません。今年こそは泳ぎます!毎年そう思うのですが、今年も草野球であっという間に夏が過ぎそうです。(ノア)

毎月第3金曜日・土曜日は、
「おきなわ食材の日」です。

沖縄

ていだサンサン
食べたらがんじゅう沖縄産!